

奈良女子大学附属中等教育学校との交流学習

9月17日(土)、本校中学部の生徒全員で、奈良女子大学附属中等教育学校の学園祭に交流学習として参加しました。30年以上続く伝統行事で毎年行っていましたが、コロナウイルス感染症の影響で3年ぶりの交流となりました。生徒全員が初めての経験で緊張している様子でした。

午前中は各グループで自己紹介を行った後、お化け屋敷や巨大迷路など様々な催し物の見学・体験をしました。活動中は口話や筆談、手話、ジェスチャーなどそれぞれが自分のコミュニケーションモードに合わせて楽しく話をしながら一緒に活動していました。午後は本校の生徒達だけで模擬店やゲームコーナーなどを巡り、大盛り上がりの学園祭を満喫していました。

そして聴覚障害のことを知ってもらうことを目的に、1年生は「全国の聴覚障害特別支援学校」、2年生は「奈良ろう学校について」をテーマに掲示物を事前に作成し、掲示しました。また、3年生は自分たちで企画した手話教室を行いました。手話を楽しんで覚えられるようにクイズを出して答えてもらったり、指文字は知ってほしいという思いから指文字を大きく提示し、来ていただいた方々と一緒に1文字ずつ表してみたり、様々な工夫をしました。参加された方も、笑顔で取り組んでくれていたのがとても印象的でした。

(文責：山中)

掲示物作成の様子

生徒が主体となって視覚的にわかりやすいように工夫しながら作成していました。知ってほしいことや、地域の学校との違いなど調べの中で新しい発見もありました。



生徒の感想

お化け屋敷や迷路などたくさん回って楽しかったです。3年生の手話教室は、15分間の中できちんと手話をゆっくり教えられていました。(1年生 女子)

午前中、一緒のグループの人が、話すためにノートを準備してくれていて筆談で色々話すことができ嬉しかったです。午後はジュースを買ったり、くじ引きをしたり、家族へのプレゼントを選んだりできて良かったです。(2年生 男子)

初めての人と話すのは難しかったけど、優しくしてくださって嬉しかったです。手話教室にたくさんの方が来てくれて緊張したけど頑張りました。(3年生 女子)



近畿教育オーディオロジー研究協議会は、聴覚障害児教育における聴覚管理や補聴器フィッティング、聴覚学習などの教育活動を「教育オーディオロジー」として確立し発展させることを目的に、近畿地区の教育機関が連携し研修及び研究を行うための会です（HPより）。今年は、8月8・9日に開催され、2日目午後の講習会では、京都大学医学部附属病院（耳鼻咽喉科・頭頸部外科）の4名の先生よりお話をいただきました。今回は、2人目の塩見先生のお話について報告させていただきます。

テーマ 「人工内耳センターのSTがしている事—教育と医療のつながり—」

○ 装用後の表出音声を採取して音響分析し、発達を考察する話 塩見 千夏 先生

人工内耳装用者の聞こえの調整（マッピング）は、パソコンソフトを用いて人工内耳に音が入ってきた時に、どの程度電気刺激をするのか、その量を決めていきます。言語聴覚士（ST）は、装用者がお子さんだと、遊びながら音の反応の様子を見て調整していきます。装用者の低年齢化や同時装用、術前の聴力やその後の発達のペースに、個々の違いが見られ、マッピングやりハビリの難しさが増しますが、健聴児と同じような経過をたどって喃語から発語につながります。

支援学校や難聴学級の先生、言語聴覚士が、お子さんの音声を聞いて評価することも十分可能ですが、音響分析によって、量的数値を用いてアプローチすることで、改めて確認できたり、色々見えてくることがあります。客観的指標の一つとして、音響分析ソフト（「Praat（プラート）」
や「Wavesurfer（ウェイブサーファ）」）を使って、音響分析を研究されてきました。



学んだこと

- ・喃語のような発話が長く続く場合でも、音響的な特徴を観察すると母音の分化が進んでいる。もうすぐ綺麗な母音が出る直前であるということを確認することができる。中でも「あいうえお」の「う [u]」が綺麗に発音された後、発音の明瞭化が進んだり、意味がある言葉の発言への移行が見られる。
- ・イントネーションが正しく知覚できるようになると、その先、助詞の獲得なども正確に再現できるようになる。その後、文字列の意味の習得につながる。
- ・難聴児には獲得が難しいとされる促音は、無音部分の長さの割合がとても重要になる。正しいバランスで発音される、もしくは音を止めていることで、初めて促音と知覚される。術後1ヶ月の時点で「あった」という発音は、音響分析ソフトで無音部分が極端に短いと、聞いた印象では「あった」よりも「ああた」に聞こえる。術後半が経つと、先行母音よりも音部分が十分に長くなって「あった」と正しく促音が実現されていることが確認できる。このように、発音できていない音も、聞こえと発達の度合いを可視化することができる。



最後に塩見先生がお話されたお話が印象に残っています。

「できていない音に対して非常に敏感な養育者さんが少し増えたのではないかと感じています。…省略…
できていることよりも『これがまだできない』とか、『○○ちゃんよりこの音できてないんです』という
ことを、すごく気にされたりします。そうした場合にも、今回のようなデータについて十分に分かって
いただかなくても『こういう風に出てくる手前ですよ』とお伝えできるだけでも、療育者の方が心の緊張
が解けたような反応を見せてくれます。…省略…音響分析は、時間がかかり、大変ですが、補完的に使用
することで、お子さんの聞こえの育ちと養育者さんの心理的負担を軽減し、良質なりハビリを提供してい
きたいです」